



虹のかけ橋

第29号 / 平成22年1月



兵庫県立但馬やまびこの郷 <http://www.hyogo-c.ed.jp/~yamabiko-bo/>

20年後の自分へ



完成した屋根

茅葺き屋根の葺き替え工事を通して



工事の様子



ロープワークを学ぶ



集めた手紙を袋に入れ、
いよいよ屋根の一番上へ

但馬やまびこの郷には、茅葺き屋根の「いろりの館」という民家風の建物があります。文字通り、そこには、いろりがあり、子どもたちや訪れる方の憩いの場となっています。

今年度、「いろりの館」では、11月から12月にかけて屋根の葺き替えが行われました。子どもたちにとってもスタッフにとっても、なかなか見ることのない作業です。

時々、活動の合間を見て、子どもたちと現場に足を運び、作業の様子を見たり、棟梁とお話したりしました。また、束ねた茅を縛るロープワークについても学ぶこともでき、小春日和の午後、職人の方々と温かいふれあいができました。

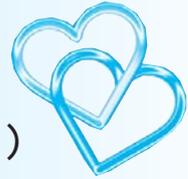
そんな中で、「次の葺き替えは、通常20年後。もし20年後の自分に手紙を書くなら、屋根に入れ込むけど」というお話をいただき、早速子どもたちと取り組みました。

「20年後の自分。何してるんやろう」と言いながら、手紙を書く子どもたち。将来就きたい仕事の話、進学の話など、手紙を書く子どもたちのそばで、いろいろな話をすることができました。中には、20年後のスタッフあてに手紙を書く子も。

将来を見つめながら、今を考える素敵な機会をいただきました。

美しく仕上がった屋根を見上げる度に、子どもたちの夢に想いがふくらみます。

スクールカウンセラーとの 効果的な連携について（その2）



兵庫県スクールカウンセラー・スーパーバイザー 今塩屋 登喜子

前号（第28号）では、「1 コミュニケーションを図ろう」「2 ケース会議等への参加を促そう」「3 家庭訪問の同行を働きかけよう」の3つの観点から、より効果的に連携を図るための取組について紹介しました。

今号でも引き続き、「コラボレーション」をキーワードにして、私自身のこれまでの実践やスーパーバイザーとして報告を受けた実践の中から取組を紹介します。



4 相談体制の充実に向けて

いじめ、不登校等の未然防止の一助として、児童生徒に対して「教育相談週間」などを設け、担任による教育相談を実施されている学校が多くあります。中でも、事前に「ストレスアンケート」等をおこない、それをもとに面談をして、特に気になる児童生徒については、スクールカウンセラーとの相談につないでいかれる学校もあります。

相談を受けたスクールカウンセラーは、カウンセリングの状況について、本人や保護者などクライアントの了解をふまえて、可能な限り担任等の先生方と情報を共有し、連携を図ろうとしています。そのための基盤づくりとして、スクールカウンセラー自身が、休み時間に校内を巡回して児童生徒に声をかけたり、給食時間に各クラスに入ったり、「カウンセラー通信」を出したりするなど、スクールカウンセラーを身近に感じてもらう日常的な実践を進めている場合もあります。

また、「不登校親の会」などに参加し、該当の保護者と悩みを共有することにより、その保護者の孤独感を解放しようとする取組もあります。当初は子の状況を学校の責任であると激しく学校批判をしていた保護者が、会への参加を通して、家庭の問題、子育ての問題、子どもの性格傾向等に少しずつ気づいていった例などは、そうした取組の成果と言えるでしょう。

スクールカウンセラーは、いじめ、事件・事故、自然災害等への緊急時においても、その専門性を発揮して“心のケア”や“喪の修復”の取組を行い、高い評価を得ています。そうした取組をより効果的なものにするためにも、スクールカウンセラーとともに日常的な相談体制の工夫を図られてはいかがでしょうか。

5 外部専門機関との連携に向けて

不登校問題に限らず、学校だけで対応することが難しいケースが増えてきている中、外部

専門機関との連携が一層重要になってきました。

県立但馬やまびこの郷をはじめ、ひょうごっ子悩み相談センター、県立特別支援教育センター、県立精神保健福祉センター、こども家庭センター、市町の教育相談センターや適応教室等の機関があり、連携されている学校も多いことと思います。

児童生徒の中には、突然の離婚、死別、失業など、家庭環境の急激な変化により不登校となるケースもあり、家庭への働きかけについて、より一層の配慮や工夫が必要となってきていることをよく耳にします。

学校におけるこうした課題の多様化により、文部科学省も、従来の公立中学校約1万校へのスクールカウンセラーの配置に加え、平成20年度から「スクールソーシャルワーカー活用事業」を展開しています。



スクールソーシャルワーカーの職務内容については、これまでスクールカウンセラーが実践してきている活動内容とオーバーラップしている事も多いようですが、スクールカウンセラーは、“個人”を重点とする一方、スクールソーシャルワーカーは、環境への働きかけ、関係機関とのネットワークづくり、学校組織の中でのシステムチックな体制の構築ということを重点としています。児童生徒の問題行動等の背景には、心の問題とともに、当該児童生徒が置かれている環境の問題が複雑に絡み合っているため、スクールソーシャルワーカーには、学校内外の枠を超えて関係機関との連携をより一層強化しながら、問題解決を図るためのコーディネーターとしての活動が期待されますし、スクールカウンセラーと同様に、今後の活用が望まれるところです。

おわりに

これまで紹介しました取組以外にも、各スクールカウンセラーは、自分自身の専門分野や持ち味を生かし、創意工夫しながら活動を続けています。

教師は「教育の専門職」として、集団の中で発達レベルや他の児童生徒との調和を図りながら一人一人にアプローチし、学級経営やその他のことに生かしていくというスタンスを持っています。一方、スクールカウンセラーは「心の専門職」として、個を重視し、個の発達に合わせて、児童生徒のそばにいて支援する、あるいは傷ついた心に寄り添っていくというスタンスを持っています。

どちらも、アプローチやプロセスに違いはあれ、最終的には、児童生徒が、自己実現を目指し、自立した成人になってほしいという方向性（願い）は同じです。新設のスクールソーシャルワーカーを含めて、時として、職務上“クロスオーバー”する事もあるとは思いますが、ともに連携することで、児童生徒の抱える課題がよりよく解決されることを強く切望するところです。



スクールソーシャルワーカーについて

「学校支援チームの設置」事業により、県下に6名（各教育事務所に1名）配置されています。

各研修会を通じて

研修の報告書から

今年度も、但馬やまびこの郷では、「不登校担当教員研修会」をはじめ、「不登校に関する研修会」「不登校児童生徒を支援する実践講座」といった各研修会を実施し、のべ392名の先生方に受講いただきました。また、学校の校内研修会に参加し、具体的な事例をふまえて、その対応について考える機会も多くいただきました。

特に、初任者研修、10年経験者研修として行った「不登校児童生徒を支援する実践講座」では、当所を利用している児童生徒との活動を通して研修を深めていただきました。

研修後に書いていただいた報告書から、受講者の意見や感想を紹介します。

〈今後の教育活動に反映できることとして〉

考え方を「問題追究」から「解決志向」に転換することです。よく学年会議等で話し合いをしても、結局、問題や責任の追及で終わることがあります。何を利用したらその子のプラスになるかを考えて、生徒に接していこうと思います。(初任者)

〈研修全体をふり返って〉

自分自身をふり返ることができました。どの子どもたちも、自分が出せる場所が必要だと改めて思いました。また、認めてもらえる場、自己肯定できる場は、どの子にも大切だと思います。

今日の子どもたちの笑顔を見て、子どもたちにとって安心できる場づくりにがんばりたいと思いました。(10年経験者)

家族の温かさを“やまびこ”から

「“やまびこ”が、家庭の問題を背景とする不登校の子にも対応されているということを初めて知りました。心因性による不登校の子だけが行く所だと思っていました。」

研修会でのある先生からの一言です。

但馬やまびこの郷は、心因性による不登校の児童生徒はもちろん、発達障害や家庭の問題等、様々な要因により不登校(あるいは不登校傾向)になっている児童生徒やその保護者を支援しています。

実際、但馬やまびこの郷を利用する児童生徒の中にも、保護者の精神的な不安定、不和、突然の離別、失業など複雑な家庭状況にある子がいます。食事がままならない、いつも同じ服を着ている、家中が乱雑で学用品もどこにあるのか分からないといった家庭での様子を聞くこともあります。



みんなで楽しく食事

そんな子どもたちが求めていることは、実は、温かいきちんとした3度の食事であったり、定時に起きて活動し、定時に就寝する規則正しい生活であったり、家族らしい温かいかわりであったりするのかもしれませんが。だからこそ、但馬やまびこの郷での生活の中で、甘えたり、ともに遊んだりしながら「教える」「ほめる・認める」という本来家庭が果たす役割を補完していく必要性を実感しています。

不登校児童生徒を含め、保護者のよりよき変容に向けた対応として、ぜひ、但馬やまびこの郷の「家族のような温かさ」をご活用ください。



にこやかな調理員さん